



磨かぬ鏡



川崎ゆきお

見えにくい。曇っており、霞んでいる。高島は鞆からティッシュを取り出した。拭き取れるものはそれしかなかった。これは磨くとは言わないが、そのティッシュで眼鏡を拭いた。そしてかけ直すと視界良好天気晴朗の風景に変わった。

「磨かぬ鏡」とう話を子供の頃、高島は聞いたことがある。読んだのかもしれない。学校の教科書で。

これは教訓だろう。それを国語の先生が導き出そうとしていた。磨けばよく見えると言うことだ。

これを心身に当てはめようとしていた。身も心も磨きなさいと。

高島はこの「磨かぬ鏡」と何度も遭遇した記憶がある。道徳のような授業のときもそうだし、誰かの説教的な話の中にも出てきた。本の中にも出てきている。

鏡が玉になったりもする。また、宝石にも。ただ、石はいくら磨いても、石のままで、それほど値打ちは付かない。

技を磨くもそうだ。芸を磨くも。研磨工やガラス磨きの人は、毎日磨いているだろうが、自分自身を磨いているわけではない。しかし、その技術は日々創意工夫がなされ、磨かれていくのだろう。

「さて僕だ」高島は、何を磨けばいいのかを探り出した。確かに今、眼鏡を磨くとよく見えるようになった。このパフォーマンスは見事で、磨く前と後では、これだけ見え方が違う。

その眼鏡を買った直前は、こんな見え方をしていたのだろう。たまに磨くというか拭くが、今日のように見えにくくなってからの話だ。不都合でなければ、磨かない。

高島はこの体験から、それを高島自身を自分で磨くことで、より良くなるのではないかと考えた。やはり実感の効果は高い。だからといって風呂で体をよく磨くということではない。

しかし、高島はつついそちらに話を持っていく癖がある。なぜなら精進とか、自分自身を鍛えるとかが気恥ずかしいのだ。別にそんなことをしてまで得たいと思うようなものはない。

「自分を高める」これも、高島はしんどいと思う。高めるのなら、ずっと高め続けたいといけないうら。これは忙しいし、それに作意が過ぎる。だから、ここで丸見えになり、恥ずかしい。

そんなことをしなくても、やっているうちに自然に高まることがあるはずだ。

これは自分自身を磨くことが目的になり、磨くために磨くことになる。やはり、餌がないと駄目だ。良いことがあるので、磨くのだろう。

眼鏡を磨いた後、高島は自分自身をも磨こうと考えたが、やはりやめた。

ここに何か胡散臭い罠、トラップを感じたからだ。

そして、高島はずっと磨かぬ鏡のままだもかまわないとは思わないが、無理に磨くことはない、結論し、この問題を交わした。